



# 灯りを贈る

すずき ようこ  
鈴木 庸子

イタリア語通訳・翻訳家 / 在イタリア・ナポリ

「担当の司祭です。お嬢さんの栄えある洗礼式に備えて、勉強会と打ち合わせをしますから、明日夕方5時半に教会に来てください。大事なことから、できるだけ両親揃って。じゃ、待ってますよ」という電話を受けたのは、娘の洗礼式を予約しておいた日曜日の前々日、金曜の夕方だった。夫は、イタリアで圧倒的多数（2008年11月外務省データでは97%）を占めるカトリックではあるが、教会に通う習慣はなく、家から徒歩10分程のドウオモ（町で最も重要な教会。我が家族はその教区民）は前を素通りしっぱなし。普段顔も見せない幽霊信者と、異教徒である妻の間に生まれた子供を、希望日の2週間程前に予約に行っただけで洗礼してくれるなんて、太っ腹なのか適当なのか。もしや洗礼式の予約自体が忘れられているのではと、翌日確認に行く予定を立てた矢先であった。

会合に出席したのは、我々の他2家族。各々の翌日の主役たちは、首も座りきっていない乳飲み子である。この冬の最中（洗礼日は1月11日）、頭を水で濡らされ、油を額に塗られたりする幼子を抱え、寒さが染みる大理石製の教会で、1時間はじっと過ごす困難を承知の上で、「キリストの洗礼日（主顕節（1月6日）の後の日曜日。今年は11日）」を是非わが子の洗礼日にと望んだであろう人たち。信心深いに違いない。皆微笑みながらも、真剣に司祭の説明に耳を傾けている。一方我が家は、大理石製のよく滑る階段の上り下りに余念のない1歳4カ月の娘の監督のため、会合開

始から間もなく私が退席を余儀なくされ、その後小1時間続いたお説教と打ち合わせは、夫が1人で臨んだ。

幼稚園がカトリック系だった縁もあり、キリスト教とその信仰・信者を尊重はしているが異教徒である私と、信者の鏡とは言えない夫ではあるが、娘のカトリック洗礼に関しては妊娠中から意見が一致していた。私にとっては、ヴァチカンを頂くイタリアでの通過儀礼という認識だが、主人の場合これに宗教的な見地がどのくらい入ったのかはわからない。

周辺の子供たちは、誕生時期にもよるが、おおよそ半年前後で洗礼を受けている。娘のそれが相当遅れた原因は、我々のようなインターマリッジ（人種・宗教等が異なる2者間での結婚）カップルで、片親が非カトリックなことを理由に、子供の洗礼を教区教会から拒否された話をいくつか聞いていて、教会との接触に神経質になっていたことにある。信心深い友人が懇意にしている司祭にお願いしたり、様々な手を尽くしたが、別の教会に通ってでもいない限り教区の壁の前には全て無力であった。それでも、直接教区教会を訪ねて拒否された場合、尾を引いた例（他の教会がOKしてくれたが、教区教会からの横やりで取り消し等）も聞いていた我々に、地域一重要なドウオモの敷居は高すぎた。そのことを同教会のボランティアである近所のおじさんにこぼしたところ、数日後



---

「この教会では両親がカトリックへの洗礼に賛成であれば、2人ともカトリックである必要はない」との言質を、なんと主任司祭直々に取って来てくれた。こうしてカトリックへの洗礼 - 原罪からの解放、神の子としての再生、教会への仲間入り - への障害の可能性が全て杞憂と判明した時、娘はすでに1歳の誕生日を迎えていた。

「ここまで待ったんだから、いっそ『キリストの洗礼日』はどう？」と提案したのは夫である。そんな日の存在すら知らなかった私だったが、私が異教徒であることで洗礼を遅らせたという後ろめたさを、お釣をつけて清算してくれそうな記念日への便乗に、諸手を挙げて賛成した。

教会が最も忙しいクリスマスが終わった時点で予約に行くと、夫も洗礼してくださったという80歳を超えられた主任司祭が対応してくれた。雑談の合間にさりげなく、私の意思を確認されたが、その声に壁は感じられなかった。

「洗礼とは、あなた方の真の愛のこもった、愛しい子供たちへのかけがえのないプレゼントです。誰も奪うことができない、この素敵な贈り物のできる喜びと責任は、あなたたちが望んで得られた親という素晴らしい責務を、一層豊かなものとしてくれるでしょう。

年端もいかない幼子に洗礼を授けてしまうのは、親の勝手な思い込みの押し付けではないか、とんだ重荷になるのではと心配される親御さんの

相談を受けることもあります。それこそ思い込みというもの。生まれおちたばかりの魂は、その存在すら知らない神の庇護という恩恵に浴し、その光に誘われて人生を進むことができるのですよ。子供たちが成長して、『このプレゼントは僕にはいらぬ』という考えに至れば、彼らは何の縛りもなく、自分の意思で離れたたり、改宗してくれるといい。そうでしょうか？」

この冬唯一の小春日和に恵まれた洗礼日。キリストのそれということで、ドウオモ一杯の信者を前に司祭様、お得意のお説教にことさら力が入ったのか、約1時間と言われていた式は2時間弱まで押した。式の直前から寝てくれた娘だったが、1時間程で目覚めると、中央祭壇真ん前の特等席から脱走を謀るは、コーラスに合わせ歌うは・・・パンを食べさせて口をふさぎ、抱えるふりで手足を押さえながら、やはりもの心つく前の洗礼には、泣きはしても身動きは取れない乳児が適当、という考えが頭をかすめた。

式が終わった瞬間、我々は一目散に外へ飛び出した。夫がお布施(20ユーロ。ただし規定はない)を納めに戻った際、他の2家族は司祭と祭壇前で記念撮影をしていたということだが、娘がどうしても教会に戻りたがらず、そのまま退散した。

我が家で確認できるこの洗礼式の証拠は、式の直前、司祭から小さな主役たちに渡された、焔が揺れるろうそくが1本刺繍されたシンプルな前掛けだけである。